

“国際版ORサロン”としてのIFORS活動



大山 達雄 (政策研究大学院大学)

2021年の国際オペレーショナルリサーチ学会連合IFORS (International Federation of Operational Research Society) 大会は、これまでで初めてのことであるが、韓国OR学会 (KORS) の主催で実行委員長Professor Chang Woo Leeの下にWebinarの形式でIFORS2021 Virtualとして8月23日から27日にかけて開催された。全部で30近くのセッションが開かれ、参加者総数は1,600名近く、日本人参加者も100名程度と盛大で、無事すべて成功裏に終了した。毎回2,000名以上もの参加者が集う国際学会がこのような形式で開催されたのは、IFORSの60余年の歴史の中でももちろん初めてであるが、例のCOVID-19、新型コロナウイルスが世界中、いや地球上のあらゆるところに蔓延したことによるものである。このような状況がいつまで続くかは未だ不確定、不明確であるが、IFORSに限らず、ほとんどすべての国際学会において、このようなVirtual Web形式が通常の形になるとしたら、わが国に限らず世界の学術界において決して望ましいとはいえないのではないだろうかと不安になるのは、小生だけではないと信じるこの頃である。

筆者がIFORSに関係する活動を最初に行ったのは、アジア太平洋地域オペレーショナルリサーチ連合学会APORS (Association of Asia-Pacific Operational Research Societies) が中国の北京で行われた1991年あたりであるから、今から30年近く前になるのではないかと思う。もともとAPORSは、世界各国のOR学会の連合体であるIFORSの下部組織としてのアジア太平洋地区を代表するものである。APORSはこれまで日本、中国、インド、韓国、シンガポールあたりが中心となって活動を支えてきている。わが国からは柳井浩慶義塾大学名誉教授、高森寛青山学院大学名誉教授、若山邦紘法政大学名誉教授、伏見正則東京大学名誉教授あたりが中心となって協力をしてきたという実績がある。APORSについては、3年に一度、IFORS開催の翌年にアジア地域のいずれかの国で開催されるのが恒例となっている。わが国では1994年に福岡で当時のAPORS会長の伊理正夫東京大学教授

を実行委員長として開催された。若山邦紘先生が長年APORSのSecretaryをやっておられたのを筆者が引き継いで1998年からSecretaryとして加わったのが、筆者がAPORS、さらにはIFORSの活動に参加協力した最初といえる。当時の筆者の学会参加、あるいは日本OR学会の国際的活動の一環については、OR機関誌記事として文献 [1-5] あたりに記したので参照されたい。特に文献 [4] においては、IFORS, ISORA, APORSという、わが国のOR学会員にとっては最も身近な国際学会である三つの学会について、その活動状況の概要を述べた。日本人のOR研究者が最も多く参加するのは、何といても3年に一度世界の“魅力的な場所”で開催されるIFORSである。毎回100人前後の参加者がいて、参加国の中でもわが国からの参加者人数は最上位に属するくらいである。ISORA, APORSは参加者が毎回20人から多くても50人程度であるのと比較すると、かなり多いのがわかる。IFORSには世界各国から多くの著名なOR研究者が集まることから、ぜひ日本の若手研究者も前もってプログラムをチェックして、お目当ての研究者に積極的にアプローチして、コンタクトを取り、友人関係を長く続けてもらえたらというのが筆者の願いである。文献 [5] では、IFORS活動に参加した自らの経験を混ぜながらIFORSの歴史の概略を述べ、IFORSの将来についても私見を書いたので、参考にしてもらえると幸甚である。

APORSは、元々アジア太平洋地区の各国のOR学会の連合体のような組織であって、研究者あるいは実務家が各国からOR学会代表として半ば“voluntary”に参加し、お互いに連絡をとりつつ情報交換をしながら、各国のOR学会活動の状況、国際学会の情報交換と企画を行い、緊密な“個人的関係”を保っているような組織であった。APORSの執行部役員は会長 (President)、副会長 (Vice President)、幹事 (Secretary)、監査 (Treasurer)、の4名であるが、“voluntary”な参加者が“個人的関係”を保ちつつ活動を続けていることもあって、会長が3年に一度開催さ

れる学会の開催国代表になるという“慣例”以外は同一人物が長く役員を務めることが多い。そういうこともあって、筆者は1998年から2006年まで幹事、そして2007年から2014年までAPORS副会長を務めた。副会長を務めた最後の1, 2年は会長不在ということもあって、会長代理も務めていたような気がする。APORS役員活動をするということは、結局、会長、副会長を中心とする役員が同時にIFORSの活動もすることになるため、IFORS執行部役員との交流も増え、アメリカOR学会 (INFORMS)、ヨーロッパOR学会連合 (EURO) を中心とする世界中のOR学会の役員仲間とほぼ定期的に付き合うことになる。筆者はAPORS副会長任期中の2013年から2016年にかけてIFORS副会長を務めた。IFORS副会長当時のことは、アジア太平洋地区代表ということで、日本OR学会活動と同時にAPORSの活動状況についても状況報告を行い、それぞれINFORMSとIFORSの機関誌であるOR/MS Today, IFORS Newsなどに記事を書いた(文献 [6-8] など参照されたい)。特に文献 [6, 7] では、公共部門におけるOR活用のわが国における教育、研究の実例を紹介し、そのさらなる積極的な推進と向上を目指す必要性と重要性についての私見を述べた。そしてそれがわが国のOR研究者にとっての将来への一つの方向付けになることを強調した。文献 [8] は日本OR学会の60周年を記念して、その各種事業の紹介と共に学会の過去、現在、未来についての私見を述べた。この稿を作成するに当たっては、当時のIFORS会長のDr. Elise del Rosarioに依頼されて著わした稿であるが、作成に際しては内容、表現の改善、改訂などで彼女の大きな協力があつたことを付け加えておきたい。文献 [9] では、自らの研究活動をもとにORの将来展望について論文形式で紹介した。IFORS副会長は会長らと隔月にネットを通して世界中の代表による電話会議を行うが、日本の場合電話時間が深夜になるため、毎回1時間近い深夜の電話会議(現在のWeb会議でない電話のみの会議であった)は結構ハードだったことを覚えている。これは、どうしても米国にあるIFORS事務局、あるいはそのときのIFORS PresidentのOffice hourに合わせることになるので、ある程度は避けられないことといわざるを得ないであろう。

今回のIFORS2021 Virtualにおいても、“IFORS History and beyond”というセッションがclosedの形で開催され、そこではこれまでのIFORS activitiesに

My involvement with IFORS had been a very rewarding one, if only for the friends I have made and will treasure forever!



Photo 1. Elise del RosarioとIFORSの歴代会長、副会長

貢献してきた10か国程度、20数名のメンバーが招かれ、いわゆるIFORS Family Salon的な雰囲気ですら2時間近く“雑談”をした。3年ごとに開催される大会時には毎回、普段はパーティ形式で行われていたので、このようなWeb形式で行われたのは初めてである。ここでは各人が数分程度、それぞれの個人的なIFORS活動体験、印象、思い出、そしてOR、IFORSの将来(文献 [9] など参照)にむけて、といった話を自由に語り、皆がそれを聞くといった形式だった。ほぼ全員がそれぞれのIFORS Memoryを語ったが、今回の会合は1時間の予定だったのが2時間近くになってしまったが、会合の後ではほぼ全員が、この会合はIFORSの昔を思い出すことができ、IFORSの歴史を知ることができ、それぞれの友人たちをより良く知るうえでもとても有効でとてもよかったというメールを送り交わしたことを付け加えておこう。

このような“IFORS Family Salon”に参加しているメンバーは、いろいろなOR関連などの学会、会議でほぼ毎回会うことになるので、お互いに顔見知りになっていることが多い。Photo 1は2007年から2009年のIFORS PresidentであったElise del Rosario (Philippines) がIFORSのPresident, Vice Presidentらと撮った写真をまとめたものである。それぞれEliseと一緒に写っているのは、上段左からPeter Bell, Sue Merchant, Graham Rand, Grazia Speranza, 中段左からNelson Maculan, Paolo Toth, Andres Weintraub, 下段左からJanny Leung, Gerhard Wilhem Weber, Karla Hoffmann, Hans Ittmann, Tatsuo Oyamaらであり、皆さんにもなじみのある人々ではないだろうか。Photo 2とPhoto 3は2017年にカナダのQuebec Cityで開催された前回のIFORS会議のときの“IFORS Family Members”の集合写真である。これらの写真



Photo 2. アジア地区OR学会からのIFORS代表（ケベック州議事堂ホールにて）



Photo 3. 各国からのIFORS代表（ケベック州議事堂ホールにて）

にある人々はほとんど全員、今回のWebセッションに参加していた。今回の集まりでは皆それぞれに自らのIFORS体験を語っていた。小生は、日本と中国のOR研究者によるセミナーであるISORA (International Seminar on Operations Research and Applications), そしてそのアジア太平洋地域における各国のOR学会の連合体であるAPORSを経て、IFORS活動に至ったこと、そしてIFORSで得た多くの友人知己たちとの私的、公的な付き合いは小生にとっても貴重なもので、特に最近はそれを長く続けることがいかに自分自身の人生にとっても、それを豊かにしてくれる大切なものであるかということを実感していると述べた。

今回もまたORのAcademicianとPractitioner, 研究者と実務家の両者を融合, リンクさせ, 両者が協力できる体制を作るべく, 努力をすべきであるという議論がかなり盛んだった。言いかえれば, 理論分野と応用分野との融合, リンクという, OR学会における“永遠のテーマ”はいつでもどこでも活発に取り上げられる話題である。ORは誕生以来, 軍事, 民間分野で大きな成果を上げ, それなりの貢献をして現在に至っており, 公共部門におけるOR理論の活用と応用

の今後の在り方を考えるべきときが来ているといえる。公共政策研究の大学院で教育, 研究に携わる小生としては, 公共部門には政策の策定, 決定, 実施, そして評価というそれぞれの側面においてOR適用の余地が数多く残っており, 最近ではそれを行政担当者も十分に認識していると確信している。したがって, OR研究者が政府, 行政との協力体制をより一層, これまで以上に積極的かつ効率的にやるべきであると考えている。

IFORS事務局のSecretaryは“Ms. IFORS”, そしてまた“IFORSの生き字引”ともいうべきMs. Mary Morganである。小生がはじめてIFORSに参加したのは20年近くも前になるが, そのときはすでに彼女はSecretaryとしてベテランぶりを発揮していたようである。今後わが国のOR若手研究者がより積極的に参加し, IFORS Family入りをされることを期待したいが, その際も彼女はすべて親切に対応してくれるはずである。

IFORSの財務面について少し紹介しておこう。IFORSの主要な収入はMembership fee, IAOR, ITOR, Conferences feeである。IAOR (International Abstracts in Operations Research) は以前には55,000US\$くらいあったが, 現在は35,000US\$程度である。ITOR (International Transactions in Operational Research) はImpact Factorも上昇中で順調であるとのことである。Conferenceは'08 Sandton, '11 Melbourneは赤字であったが, '14 Barcelona, '17 Quebec Cityはそれぞれ24万US\$, 17万US\$と大きな黒字となったとのことである。一方, 主要な支出はOffice secretary人件費, Web management, ITOR Newsletterなどである。全体として2018年は支出14.6万US\$, 収入8.7万US\$, 2019年は支出14.6万US\$, 収入8.1万US\$となっている。過去3年間については支出43.8万US\$, 収入25.5万US\$であるので18.3万US\$の赤字となるが, IFORS資産として約140万US\$あるので, IFORS for Better Futureを考えたいとのことである。

IFORSではITORに続く新たな学術誌を発刊する予定である。ORの真髄(?)ともいうべきQuantitative challenges for the SDGsとして, UN (The United Nations) が定めたグローバルな話題に対するSDGsの目標達成に貢献したいとのことで, Sustainability Analytics and Modeling (SAM) を刊行予定である。

3年ごとのIFORS Conferenceも, メンバー同士の

交流もWebで行われたのは今回が初めてである。Webを通しての交流は一人の話し手が話すのをほかのすべての参加者が聞くというスタイルのために、参加者が多くなると一人当たりの話せる時間も短くなるため、どうしても効率は悪く、対面、パーティのように小グループでの会話も不可能である。このような状況がいつまで続くかはわからない。せめてできるだけ早くコロナが終息し、元の日常に戻るのを期待したい。

小生は、これまで長い間、多くのIFORS中心メンバーとメール、各種会合、国際学会などで付き合ってきた。IFORSがサロンのような雰囲気を有する集まりであることは今回も感じた。やはり時代の流れ、状況の変化のせいであろうが、小生が良く知る友人も少しずつ減り、Secretary Mary Morganとほかわずかになりつつあるようである。各国とも世代替わりをしているようで、新たな友人もどんどん出てきているを感じる。そんな中でこれまで老兵(?) Tatsuo Oyamaが働いていたのは、貴重といえば貴重だったのかもしれない(少なくともMaryが喜んで(?)くれたので)。そろそろ、わが国のOR学会も若手(今の小生の年齢からすれば、ほぼ皆さんが若手になるのであろうが)の中にも、現学会国際委員長の鶴飼孝盛氏、前委員長の矢野浩仁氏、前々委員長の後藤順哉氏などをはじめとして、多くの国際的な交流、活動に関心のある人々

も出てきている。これらの皆さんが中心となって、積極的なORの国際的活動に参加されることをぜひともお願いして、そしてそれが実現することを期待して、本稿を閉じることにする。

参考文献

- [1] 大山達雄, “インドOR学会に参加して,” オペレーションズ・リサーチ: 経営の科学, **47**, pp. 187–188, 2002.
- [2] 若山邦紘, 大山達雄, 香田正人, “IFORS2002参加同行記,” オペレーションズ・リサーチ: 経営の科学, **48**, pp. 54–59, 2003.
- [3] 大山達雄, “APORS2003に参加して,” オペレーションズ・リサーチ: 経営の科学, **49**, pp. 174–175, 2004.
- [4] 大山達雄, “IFORS, ISORA, そしてAPORS,” オペレーションズ・リサーチ: 経営の科学, **50**, pp. 843–846, 2005.
- [5] 大山達雄, “IFORSの活動と運営に参加して,” オペレーションズ・リサーチ: 経営の科学, **53**, pp. 700–703, 2008.
- [6] T. Oyama, “Educating Japanese government officials,” “ORSJ to celebrate 50th anniversary,” *OR/MS Today*, **34**(2), pp. 42–46, 2007.
- [7] T. Oyama, “OR activities for the public sector in Japan,” *IFORS newsletter*, **3**(2), pp. 2–3, 2009.
- [8] T. Oyama, “ORSJ @60: Revisiting the past, redefining the future,” *IFORS news*, **11**(1), pp. 12–14, 2017.
- [9] T. Oyama, “Looking for and aiming for an Asian OR applicable to the public sector,” *Journal of the Operations Research Society of China*, **8**, pp. 537–559, 2020.